

【書評】

高原 康彦, 高津 信三 編

経営情報システム

日刊工業新聞社 A5判 305頁 1991年4月刊 定価 3200円

本書は、経営情報システムを、経営学・情報学・システム論の立場で紹介している。広いテーマであるが、6人の分担でよく300頁にまとめられたものだと感心する。目次に見るように1章から3章までが経営システム、4章と5章は情報システムの分析と設計、6章から10章までは個人レベルでの情報処理について述べている。これらの多彩な内容をシステムの状態概念で結びつけようという意図は評価できる。著者らは、姉妹編の「経営システム」同様、文科系・理科系の区別なく経営情報システムの入門的教科書を意図している。筆者のような企業人として多少経営情報システムに接している者でも、独学のための参考書としては紙面の制限を考えなければもう少し詳しく説明してほしい点もある。

目次は次のとおりである。

1章総論, 2章経営情報システム, 3章情報ネットワークと情報環境, 4章情報システム分析, 5章情報システム分析, 6章スプレッドシート, 7章統計データの解析, 8章コンピュータプログラム, 9章シミュレーション, 10章エキスパートシステム。

1章では、情報科学の歴史と情報を比喩を用いてもわかりやすく説明している。

2章は、コンピュータ、情報処理の歴史をふまえ、経営情報システムの分類をわかりやすく説明されている。

3章は、最近の新しい技術動向であるクライアントサーバモデルを初心者にもわかりやすく説明してあるが、3.3節のネットワークによる組織学習は、もう少し説明がいるように思う。

4章は、情報システム分析を、組織活動分析とファイルシステム分析の統合であるとし、ファイルシステムの論理構造をデータモデリング機能を用いて記述することを紹介している。これはリレーショナルDBとも関連する重要な概念であり、理論的な説明のあと、学会会議準備組織という事例で補足説明している。紙面が限られていることを考えれば、この事例でもって理論背景も一緒に詳しく説明してもよかつたのではなかろうか。

5章は、情報処理システムの設計論において中心的なアプローチであるライフサイクルアプローチの全体像を

「オートマトン」と呼ぶ表現手段を用いて明確にしている。そして、ウォーターフォール型モデルの各フェイズで利用されるデータフローダイアグラム等の技法を紹介している。しかし、ハードウェア生産や実時間制御系や技術計算において有効であるが、商業データ処理などのソフトウェア開発における有効性には疑問があり、それに代わるものとしてプロトタイピングアプローチと形式仕様記述を簡単に説明している。そして最後に、意思決定支援システムの特徴を述べている。本章は本書の要であるので、もう少し詳しく説明した方がよいのではないかと思う。

6章は、LOTUS 123の表計算、グラフ、データベースとマクロについてわかりやすく説明している。後との関係でマクロを詳しく説明しているが、グラフにも少し紙面を割くという選択もあったのではなかろうか。

7章では、マクロを用いて回帰分析や主成分分析を説明している。統計に想い入れのある私としては、本格的な統計教育には統計パッケージの利用をお願いしたい。

8章は、BASIC と PASCAL によるプログラムの紹介である。企業においては、事務計算に PL/1 と COBOL、技術計算には FORTRAN が用いられており、BASIC はあまり利用されていない。大学で教える言語として何がよいか、もっと議論がなされてもよいのではなかろうか。また、5章の形式仕様記述の説明に際して Prolog が用いられているが、これを広く言語を紹介するのに役立つと肯定するのか、欲張り過ぎと考えるかは意見が別れよう。

9章は、シミュレーションの概略とモンテカルロシミュレーションをマクロと PASCAL で説明している。

10章はエキスパートシステムを AND/OR グラフを用いた状態推移として説明しているが、入門としては少し難しいのではなかろうか。

以上勝手を述べたが、幅広い知識を有する教師が補足説明を加えて教科書として使うには、コンパクトにまとまっている。しかし、自習書として使うには、かなりの知識と見識が必要になる。

(新村秀一 住商コンピューターサービス)